

# 錦之助の「祇園祭」多角的に

日本映画の黄金期とされる昭和の中頃を中心に、日本映画史の産業的側面に光を当てた論考集「映画産業史の転換点」(谷川建司編)が刊行された。京都人文科学研究所での共同研究を基に15の論文を収録。特に京都府が出資し、中村錦之助がプロデューズ兼主演を務めた映画「祇園祭」(1968年公開)について

は、映画研究者だけでなく、歴史学者らも交え、作品を巡る背景を多角的に読み解いた。

映画「祇園祭」は、応仁の乱で荒廃した京を舞台に、染め物職人(錦之助)を中心とする若者たちが団結して町を再建、山鉦巡行を再興する物語。錦之助が代表を務めた会社「日本映画復興協会」



論考集「映画産業史の転換点」。映画「祇園祭」で主演した中村錦之助の写真を表紙にあしらった

## 「映画産業史の転換点」刊行

が製作し、三船敏郎、高倉健、美空ひばり、岩下志麻らトップスターが共演している。

当初の監督は、戦前から時代劇映画をけん引した巨匠の伊藤大輔だったが、途中降板し、山内鉄也に交代した。板倉史明・神戸大准教授(映画学)は、脚本家の権利が強まった当時の著作権法改正の

## 京大人文研、共同研究の論考集

議論を踏まえ、降板に至る経緯が「監督と脚本家の権限をめぐる対立であった」と指摘。監督が脚本に改変を加えることは慣習的に許されると考えていた伊藤に対し、脚本を担った鈴木尚之は、監督をはじめ他人が勝手に改変することは許されないと考えていたとする。

京楽真帆子・滋賀県立大教授(日本史)

は、伊藤や夫人の思いが記された当時の日誌を歴史的に解読。町衆が幕府からの自治を勝ち取る象徴として祇園祭復興を描こうとした伊藤に対し、歴史観の共有が脚本家と十分にできていなかったことを浮き彫りにした。

高木博志・人文研教授(日本近代史)は、革新府政だった映画製作当時の蟻川虎三知事が府政百年事業として支援するなど「戦後京都に流れた統一戦線的思想の最後の光芒」として、映画「祇園祭」を位置付け。公開された68年は、政府主

導の明治百年祭が各地で盛んだったが、違う形で「市民からの明治百年のあり方が模索された」とみる。

木村智哉・玉川大講師(映画産業史)は、大手映画会社が俳優の専属制を強化した「五社協定」や、時代劇から「俠映画へと変わる東映の路線転換の中にあつて、時代劇スターとしてキャリアを積ん

だ錦之助の葛藤や、俳優の労働運動との関わりを記した。

このほか今年1月に亡くなった上野隆三さんら東映剣会の殺陣師への聞き取りを中心にした「京都と時代劇再考」(小川順子・中部大教授)▽映画「西陣の姉妹」(1952年)から考える「戦後の日本映画における西陣機業と地域表象」(須川まり・追手門学院大特任助教)▽京都生まれの日本画家・甲斐庄楠音と溝口健二監督作品の関わりをひもとく「絵師と映画監督」(小川佐和子・北海道大准教授)なども収録。京都の文化や地場産業と映画のつながりを明らかにする。

基となった人文研の共同研究「オーラル・ヒストリー・アーカイヴスによる戦後日本映画史の再構築研究会」は、2016年から3年間にわたり学内外の研究者が各テーマの調査研究を進め、議論を深めてきた。

4730円。森話社。(三好吉彦)